

## INTERVIEW

恵那医師会 会長  
古橋貞二郎 先生



【プロフィール】 古橋貞二郎 先生 昭和31年、岐阜県立医科大学（現 岐阜大学医学部）卒業。県立岐阜病院に勤務後、武儀村（現 関市）の診療所に6年間勤務。その後、昭和42年、中津川市にて古橋内科医院を開業し現在に至る。平成8年より恵那医師会会長を務めつつ、ジェネラリストとして精力的に活動が続いている。

# 町医者の生きざまが、 医療の真髓を伝える。

聞き手：山田隆司 社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

## 亡くなられた後に報いる

**山田隆司（聞き手）** 今日には恵那医師会館に、会長の古橋貞二郎先生を訪ねました。古橋先生には市立恵那病院開院時に大変お世話になりました。

まずは、先生のご経歴からお話いただけますか。先生はこちらがご出身なのですよね？

**古橋貞二郎** そうです。岐阜県立医大を卒業し、そのあと岐阜県立岐阜病院でインターンとして働きました。その時に病院長の山中義一先生に、医療というのはこういうものだということを学びました。

**山田** そうすると県立病院に6年間いて、それからこちら

に戻ってこられたのですか。

**古橋** そのとき森下先生という寄生虫の先生から、寄生虫の教室に残らないかという話をいただいたのです。でも私は郷里に帰って開業したいと考えていたので、今やっていることはいわゆるジェネラルなことではないので、もう少しジェネラルなことをやってみたいと、森下先生にお願いしました。

**山田** もう50年近く前ですよね？ その当時でもう県立病院での医療は専門分化していて、開業医が担うようなジェネラルなものではなかったわけですね？

**古橋** かけ離れていましたね。だから、森下先生にお願いしたところ、武儀郡武儀村、今の関市武儀町の庁舎の裏に診療所があって、そこはどうか？という話になりました。

**山田** 今でもありますよ。建て替えましたが、現在も自治医大の後輩が赴任しています。

**古橋** そうですか。そこは内科、外科、母子センター、歯科があったので、連携がとれるので望むところですよ、そこへ行ったのです。

**山田** 何年ぐらいいらしたのですか？

**古橋** 6年ぐらいかな。私にとっては非常に有益な時間でした。

**山田** では、先生は、当時から故郷へ帰って開業しようと、心の中で決めていたのですね。武儀の診療所のあと、こちらで開業されたのですか？

**古橋** そうです。

**山田** それから、何年ですか。

**古橋** 40数年ですね。

**山田** 40年ですか！？2世代以上のお付き合いですね。

**古橋** 実は私は大学の7年間と県立病院の6年間の合計13年、お寺に下宿していたのですが、われわれの職業では見えない部分を見て、そういうことも加味しながら生きていくのがドクターとしての姿ではないかと考えるようになりました。その寺は日蓮宗で、いろいろお話を聞くうちに、患者さんが亡くなった際に死亡診断書1枚の書類で済んでしまうことは是か非かということに突き当たって悩みました。それで、開業10

周年にそれまでの死亡診断書をすべて見返して、俗名、数え年、住所を書いた過去帳を作って、お寺に預けることにして。そのお寺で法要をしてもらっています。

その過去帳を見ると、一人ひとり思い出があります。その中には、ある女性がいるのですが、胃がんで本人には告げていなかったけれど家族には告げて、市民病院に入院したのですが、翌日出てきてしまって私を呼ぶのです。「私はあんたにかかって死にたい」と。このひと言が医者冥利に尽きました。「よし、分かった。そのかわり小まめに往診をするでな」「頼むね」と、1日に何度も往診に行って、自宅で死を看取った。この方は死を悟って亡くなられたと思います。

そういった経験の中で、亡くなられた後、どう報いていったらいいかと考えるようになって、過去帳に記帳をしてそれをお寺に預けていました。現在は自宅に持ってきて、毎朝、お茶とお水と、仏飯をあげて、お線香と蠟燭で、今日も来院した患者に過ちがないようにと手を合わせています。

**山田** 先生が自ら死亡診断書を書かれたような患者さんですか？何人くらいになっていますか？

**古橋** 500人は軽くオーバーしていますね。

**山田** 先生は、40年以上ここで開業されていて、家族ぐるみでずっとお付き合いをされている家が多いですか。

**古橋** 多いですね。開業する前にいた武儀には6年いましたが、そこを去ってもう40年です。それでも今も「餅ついたんで取りに來い」といった連絡があって、毎年私は12月30日に必ず取りにいきます(笑)。

## この地で40年、継続して家族とかかわる

**山田** 長く付き合うということが重要なことだと思うのですね。その人なり、家族なりがよく分かる。

**古橋** ですから私は開業してから今まで往診を断ったこ

とは一度もありませんよ。

**山田** それはすごい！最近では、患者さんがまず開業医のところにかかっても、医者側が自分の専門だけ

を診る、自分が決めた時間だけ診療するという人が多いですね。でも本当に自分がかかりつけだと言ってもらえるのは、診療時間が終わってからの対応だと思うのです。あの先生だったら、何時に電話しても、とりあえず相談にのってくれると、一番大事なのは、自分がかかりつけだと思ってくれる患者さんや家族、自分を頼ってくれる人に対しては、自分の電話番号を教えるなりしていつでも対応できるようにすることだと思うのです。特に私は今病院にいますが、「昼間、開業の先生に診てもらって帰って薬を飲んだけれど、具合が悪くなってきた。心配だから診てほしい」と電話をしたけど、5時以降なので電話に出てくれない」と来院する患者がいます。夜中だけ病院の医師が診なければいけないというようなことが増えていると思います。せめて昼間診た患者や自分のかかりつけの患者には、開業の先生たちが責任を持って対応すべきだと思うのです。

**古橋** 今、恵那医師会の中津川医会では平日時間外の輪番制の体制をつくって対応しようとしています。

**山田** もちろん輪番制は必要かもしれませんが、でも、先生が40年間やってこられたから患者さんも先生を深く信頼しているわけで、患者と医者との深い絆のようなところは、元気なときはいいけど、困ったときに、困ったときこそ…。

**古橋** 救ってもらいたい。救われたい。これは誰もが持つ感情ですよ。

**山田** 先生は、今、79歳になってもそれを続けられているというのがすごいと思います。先日も夜遅くに電話番号帳に載っている先生の医院の番号にお電話を差し上げて、先生自らがお出になったのでびっくりしました。しかし、一方で家族も含めてプライベートの時間が侵されるわけですよ。患者さんのために時間を割いて、そのことで先生は報われている。

**古橋** 私自身は報われているけれど、家族は報われてない。それでも私にとっては、自分の職業を通じてのこ



聞き手：地域医療研究所所長・「月刊地域医学」編集長 山田隆司

とがいちばん大事だということですね。

**山田** 医師という職業は、公職というか、多少プライベートの部分が侵害されることを覚悟するべきだと私は思っています。

**古橋** しなきゃいかんと思います。

**山田** 今、医師会の先生方も、若い世代も、医学部を志す人たちも、医者になったら、家庭を守って、自分の生活はきちんとして、医者の仕事はスマートにやっていきたいという人のほうが多いですよ。

**古橋** 多いですよ。私たちはというと、ひとつの目的を実現するために頑張ってきた。

**山田** 特に1次医療に携わる人たちの魂というのは、本来そういうことであつたと思うのです。ところが現在は、進学校のトップの人たちが、将来それなりの地位も保証されるだろうということで医学部を選択する。だから卒業して診療科の選択をするときも、リスクの少ない科を選び、産婦人科はやめておこう、あるいは開業しても診療時間は区切って、診療所と自宅は別々にしよう、休日当番もできるならかわりたくないといった考えの人たちが多い。

**古橋** 時代もそういう人たちを作ってきているのではないですか。

**山田** でも、先生のように、町医者之魂みたいなものを見せない患者は真に信頼してくれないと思います。

**古橋** 惚れてこない。たとえば、私は木曜日に診療所を不在にしますが、「先生、昨日おらなんだで、今日来た」という患者さんがいてくれます。1日待っても来てくれる。そういうつながりは強いですね。

**山田** 「惚れる」と言われましたが、まさしく非常に個別なものです。患者さんと自分の関係は、患者さんと付き合う以上、本当は誠意を見せて個々の人にそれぞれ自分に惚れてもらう、自分を選んでもらうということだと思います。

**古橋** たくさんの人から惚れられないといかん。

**山田** それが一番医者やり甲斐だと思うのですね。

**古橋** でも、そういうことが若い人たちに言わせると、「ご

つい」と言う。

**山田** ごつい。そうそう。この辺の方言で、無骨で要領が悪い、格好悪いというようなことですね。でも、患者さんが信用するのは、そういうごつい医者ではないかと思うのです。日本の医者が要領よく、表面的で、スマートに流れた結果、実はよくなかったと思う。

**古橋** 今日を招いた。

**山田** はい。医療というのは、どれだけ進んでもそんなに患者さんを救えるものではない。でも、専門医療ではとにかくより救える方向に進化して、それで最新の医療は万能のような錯覚を持ってしまう。医療にできることは人間の運命からすれば本当にひと握りのことなのに。

私も自治医大を出て、人が行きたがらないようなへき地へ行かされたからこそ、医療の限界を肌で感じて医師と患者の関係の重要性に気づかされました。

## 1次医療の担い手を育てる仕組みが必要

**山田** 私は現在、総合医を育成するというような仕事にもかかわっていますが、特に地域で開業する医師に関しては、何でも診る、いつでも相談にのるという町医者の基本を伝えていかなければいけないと思っています。

海外のシステムが必ずしもいいとは思いませんが、家庭医、プライマリケアのトレーニングを提供している国はとても多いのです。日本でも、開業医や1次医療を担っている医師が多い日本医師会が、率先してそういう医師を育成してほしいですね。

**古橋** そういう仕組みは、今まではなかったですね。

**山田** そうですね。現在、病院医療に支払われる医療費というのは極端に制限されていて、だから病院の医師は業務が非常に多いのにそれに見合って給料が

高いわけでもなく疲弊してしまう。せっかく高度な専門技術を学んだ専門医たちが病院に残れるような環境を整備することが必要だと思います。そして1次医療を担うような開業を志す医師については、いつでも何でも診るというような人たちを中心に育てるとい仕組みが必要だと思います。

私は今、日本家庭医療学会の代表理事として、日本プライマリ・ケア学会、日本総合診療医学会と3学会協同で総合医育成の議論をしています。学会を大きくしたいとか、学会の方向性をどうこうしたいということではなく、医者との信頼関係というのが実は医療の中で最も大事だという価値観を、世の中の人たちにもう少し分かりやすく伝えたいと思います。



**古橋** 日本医師会も含めて、一番大事なところはここだということと言えるようにしていかななくてはいけないですね。

**山田** そう思うのです。この仕事は医師会の先生たちにとって一番大事な仕事ではないかと思います。1次医療、患者さんに一番近い医療の本当の質の高さを学ぶこと、教えること、伝えることが。だから、3学会がまとまって、そういう価値観を共有して、国民にもきちんと伝えていきたい。

**古橋** 共有して、それを伝える。

**山田** そうです。だから、フリーアクセスはある程度制限されたとしても、患者はまず自分の身近な医師にかかる。何かあったらその医師から病院へ橋渡しをしてもらう。そうすれば医師も責任と豊かさを感じながら一所懸命対応し、だんだん育っていく。

開業を志す医師と大きな病院で先端医療に携わる医師は、初めからある程度道が違って、開業する医師は最初から、一つの地域で先生のように40年やってやろうという気概のある人たちが選択するということにすべきだと思うんです。

## 医療の真髓を伝えるために

**山田** 今、若い研修医の中にも、患者さんに近いところで仕事をしたいと思っている人たちは、結構な割合でいると思うのです。だから、先生のような生きざまを、きちんと知らしめたいですね

**古橋** 私は開業しようと思っていたので、開業のためにどうあるべきかということで、武儀の診療所へ行ったのが非常にプラスになったと思っています。

**山田** それを礎にされて、往診を断らず、過去帳をつけ、40年間やってこられたというのは、やっぱりすごいと思います。

先生の町医者としての生きざまみたいなもの、1次医療の一番大事なところ、それが今はうまく伝わっていない。本当は医学部という門戸のところから、医療にとっては、最先端の臓器移植や遺伝子医療よりも、医者之魂のようなものが大切なこともあるということをお伝えなくてはいけないと思うのですが、それが今の医学教育では…。

**古橋** ないでしょう？

**山田** ほとんどないですね。少しずつコミュニケーション技法や、患者さんの痛みを共感する態度といったことが

医学教育にも取り入れられてはきましたが。

**古橋** お寺に下宿したことが、心の面で私を育ててくれたと私は感じています。

**山田** 医療で救えない人が大勢いるわけです。不治の病になって、あるいは末期になって、老衰で、という人たち。死にゆく人に対して、たとえば緩和ケアを専門にしている医師だけが何か特別なことができるのかというとそうではなくて、先生のように患者さんと20年、30年、40年付き合ってきたからこそ、手をつなぐことで逝こうとしている患者さんは心が安らぐ。

**古橋** 僕が診て亡くなった人たちは、僕の自己満足かも知れませんが、満足して亡くなってくれたと思っている。

**山田** それは先生と患者さんがお互いにつくった関係、お互いが努力した結果だと思うのですね。

**古橋** そうです。患者、家族も含めて、私との関係ですね。

**山田** 現在の医師会の先生たちが総合医のことに注目していただいているのは有り難いことですが、同時に医学教育や研修医の教育にも力を貸していただきたいと思っています。古橋先生のような町医者になりたいという若い医師たちもいるのです。医者になっ

て自分のプライベートの生活が侵されてもこの職業を選びたいと、だからそういう道を作っていく必要がある。

**古橋** 若い人たちに、角度を広げて見てもらいたいですね。先人供養をしながら、それぞれ幅広い人間になってもらいたいなと思っています。

**山田** そう思います。先生のような生きざまの医師が、き

ちんと評価されて、そういう人たちが表に立って、開業したらそうなることこそ尊いのだと示す。そういう医者になることによって地域の人たちから信頼を得られるのだと伝えていければ、医療はもっとよくなると思うのですけどね。

今日はお忙しい中、ありがとうございました。

